学校生活での気遣い

副校長　小林　寿典

人と人を結びつけるには、思いやりの心が必要です。相手を思いやる心さえあれば、仲間との関係はとても上手くいくことが多いです。中学校での生活を上手に行うためには、仲間同士がさまざまな利益を抜きにして、相手を思いやる心がなければなりません。

中学校での気遣いとは、さまざまなルールでありマナーであり、校則もその一つです。互いがいろいろなことを理解し、思いやる心があれば、学校での生活はとても落ち着いて穏やかな時間が進んでいきます。

260年以上もの間、経済の繁栄と戦争のない平和がもたらされた江戸時代。その時代に「江戸しぐさ」という手立てや所作が存在したといわれています。そこには江戸商人のリーダーたちが築き上げた、よりよく生きるルールのようなものがありました。ただ、歴史的根拠や文献が存在せず、実際にあったものかは不明です。しかし、その内容は、社会生活で大切なことであると思います。その基本は、思いやりの心をもって、みんなが仲良く、平和の下で共に生きるために争い事を少なくし、人に対する言葉遣いやしぐさにも気を配るというものです。

「江戸しぐさ」の現代版「石西しぐさ」を皆で考えるのもよいでしょう。

「江戸しぐさ」の紹介

「傘かしげ」

雨や雪の日、傘をさしてすれ違う時に、相手も自分も傘を外側に傾けてスッとすれ違います。体に雨や雪のしずくがかからないようにするとともに、ぶつかって傘を破らないようにする意味も含んでいました。

「うかつあやまり」

人込みの中で、足を踏まれたとき、踏んだ方は言うまでもありませんが、踏まれた方も「こちらこそうっかりいたしまして」と謝りました。こうすればトゲトゲしさはなくなり、いさかいを防ぐように努めました。

「いただきます」

食事の前の感謝のことばです。「大江戸のおかげさまで、今日も一日、心と体にぬくもりの糧のいただけることを有り難く思い、よく噛みしめていただきます。」戦乱に終止符が打たれ、江戸時代が安定するにつれ、このような表現になってきたことは無理もないことでした。しかし、本来は五穀豊穣の神様や海や山の幸を実際に食卓に届けてくれた農民や漁民の人々への感謝を意味していました。

「あいすみません」

「江戸しぐさ」は常に相手に対する尊敬の念を忘れず、一言ひとこと、気配りのある表現をすることがたしなみとされました。すみませんは「澄みません」と書きます。目の前の人を仏と考え、澄んだ気持ちになれなかったと詫びる言葉です。商人は「せっかく、お越しいただいたのにお気に入りの品物がなくてあいすみません」とお客様にお詫びをしました。

「ありがたい」

ありがたいとは有り難いと書きます。よくあることではないということです。江戸の商人は、買い物はどこでしても良いのに、わざわざ当店ごときで買ってくださるとは有り難いことで、それに感謝して「お礼」申し上げるという意味で、「ありがたく御礼申し上げます」と言ったそうです。「ありがたい」は略式表現であったようです。

「刺し言葉」

「胸刺し言葉」とも言います。人の感情を逆なでするとげとげとした言葉は不和のもとになります。重箱の隅をほじくるように、チクリチクリと指摘するやり方なども良くないとされました。

まだまだ、たくさんあります。自分の行動や発言を振り返り、感情に任せず、穏やかに学校生活を送ることができると、周りの人たちも同じように考えてくれると思います。